

# 『標茶町郷土館報告』 第27号が刊行されました。

年1回発行の標茶町郷土館報告の第27号が刊行されました。郷土館報告は、本町を中心とした自然や歴史の論文、報告、雑記などをまとめた報告書です。

今号では横平弘氏による「国有林地にさらに「女性集治監を」一刑務施設の民間委託性を活用一」、小荷田行男氏による「縄文文化期における北海道釧路湿原塘路湖周辺の自然環境」などの提言や歴史に関する論考のほか、飯島一雄氏による昆虫類の報告「北海道東部の鞘翅目」など9本を掲載。また塘路地区の発掘調査報告も載っています。

希望する方には無料配布しています。郷土館までご連絡ください。



## 大川のほとり

—郷土館だより(第68号)—  
☎487-2332  
開館時間  
午前9時30分～午後4時30分

郷土館より 上  
一筆啓上

新年となり、集治監事務所だった郷土館も建築から130年目を迎えました。床を歩くとギンギシと音が鳴りますが、いまだ現役。この貴重な建物と共に、皆さんのお越しをお待ちしています。(坪)

北海道の道路工事で最も過酷な工事と言われた中央道路開削は、札幌から網走までを繋ぐ現在の国道12号線、39号線、333号線の基礎となった道路です。網走分監は上川から網走までの約157kmを担当し、8カ月で完成させました。これは単純計算すると、無休で未開の原始林を切り開き、1日約600mの道路を作る必要があります。当初より無理な工事になることは分かりきっており、多くの囚人が労働の果てに病気となり死亡しました。一方で中央北海道へ攻めてきた際に、石狩方面から直ちに兵を向けるための軍用路となるなど重要路線でした。開拓と国防のため、囚人に犠牲があっても突貫工事が行われたのです。責任者でもあった四郎助は、過酷困難な大仕事を成し遂げ評価を得ますが、一方では労働の果てに囚人を死へと追いやる非情な現場監督でもありました。国家的大事業の命令に従った四郎助は、大きな苦悩を抱えたのです。

以降、網走分監では囚人たちの労働を農業主体へ切り替えました。明治27年11月、四郎助のもとに一通の手紙が届きます。それは釧路分監のキリスト教系教誨師大塚素からでした。中には新約聖書の『マルコ伝』を各章ごとに解説したものが、便箋5枚に書かれており、最初の1枚にはこうつぶられていました。



中央道路の仮監獄

遠軽町瀬戸瀬に設置された道路建設用の仮監獄。後年、建物付近からは囚人の遺骨40体が発見された。

(前回のあらすじ)有馬四郎助は文久4年(1864年)鹿兒島県鹿兒島市下荒田町にて益満喜藤太の四男として生まれ、士族である有馬平八の養子となり有馬姓を名乗りました。明治19年より釧路集治監の看守長として3年間を標茶で暮らしました。典獄大井上輝前や教誨師原胤昭らに出会い大きな影響を受けた後、空知集治監を経て、明治24年に北海道集治監網走分監(後の網走監獄)へ異動しました。そして網走分監に着任すると早々に、中央道路建設という大事業を指揮する事になったのです。

釧路集治監人物伝 最終話 中編 4

愛の典獄 有馬 四郎助



—全道一の酪農の町から— 「全道一 多い入賞」

『広報しべちや』は、昭和40年から発行されており、今年で51年目となります。本町の広報誌は昭和24年に『月間標茶』（後に『標茶公民』）を公民館から発行した事が始まりとされ、後に町長となった高島幸次氏（当時は公民館長）が大きく関わっていました。昭和31年から『町政だより』というタイトルで、役場より全戸配布されました。今回は昭和35年1月10日発行の第41号をご紹介します。



第41号の見出しは「全道一の酪農の町から全道一多い入賞」です。昭和34年に行われた北海道乳質改善共励会で、町内各地区から全道一となる最優秀賞を始め、たくさんの賞を受けた事が掲載されました。

この共励会は、北海道と北海道乳質改善協議会の共催で、一定規模の団体を対象に、良質な原料牛乳生産のため一等乳率と細菌数により審査されました。この年は全道110団体が参加し、最優秀賞に「磯分内中南部酪農員会」、優秀賞に「弥栄開拓農業協同組合」「上茶安別酪農委員会」「磯分内東部酪農委員会」「沼幌酪農振興会」「徳富酪農委員会」が選ばれたと記されています。

北海道乳質改善共励会は昭和27～49年まで実施されました。戦後の酪農普及が急速に進む中で、さまざまな管理の元で集乳を行い、乳質低下した牛乳を出荷する場所もありました。その結果、昭和30年に北海道産脱脂粉乳が原因で、東京都の2000人近い小学児童が食中毒となる事件が起こり、これを契機に乳質改善に関わる各種事業が強化され、北海道乳質改善協議会が誕生しました。

本町は翌昭和31年に集落酪農地域に指定され、酪農モデル地区として急速に整備が進められていきました。その時期に評価を得た事で、酪農への手ごたえを感じたことでしょう。また町内幅広い地域が入賞した事は、広範に良質な牛乳生産を行っている証でもあり、酪農への明るい未来を感じたはずで

「マルコ伝第1章福音 福音ということ、初めには何の事か十分に分らないと思います。これは後に十分にその意味が分かるようになります。私たちが神を知り、神が私たちとの関係を知り、人の幸せを深く感じ得るに至るのはキリストのおかげであり、ここに至って福音の福音たる事を知り得ることです。小弟（大塚のこと）は兄（有馬のこと）がついに、なるほど福音なりと納得する時が早く訪れる事を願います。」

以降は章ごとに手紙4～5枚が送られてきました。四郎助は手紙の各所に傍点や点を打ち「心すべし、大いに心すべし」「友愛の情紙上に溢る」などの書き入れを行い、何度も読み直し大切にしました。大塚による手紙という形の聖書講義は、翌年3月29日に最終16章へ至るまで休むことなく続けられ、手紙の枚数は75枚を数えました。後にその手紙はまとめられ、『友愛』と題した一冊の和綴本となります。四郎助はその扉に

「教誨師の激務にありながら、寸暇に乗じて小生の為にこの講義を送せらる。所説懇切、言々友愛の熱情より出づ。頑鈍の心感動せざる能はず、これ小生が天恩裕かなる無限生命を享受するに至る初階たりし也。」と記し、秘蔵の宝物としたのです。なお大塚と四郎助はこの手紙のやり取り以前に個人的な縁があったかという点、よく分かっています。大塚



壮年の大塚素  
『大塚素日誌と友愛』より引用

は四郎助に手紙を送った年に、初めて北海道へと渡り、釧路分監へ赴任したばかりの若き教誨師でした。しかし大塚は、前任者原胤昭より四郎助の事をよく聞いていたと思われま

す。大塚は状況を知り、中央道路の指揮で精神的に大きな負荷を背負っていた四郎助に対し、信仰という光を受けました。この時、四郎助は34歳でした。

明治28年、埼玉県監獄の典獄となった四郎助は、北海道集治監を離れま

す。その後、明治31年に霊南坂教会の牧師となっていた留岡幸助より洗礼を受けました。その年の8月に巢鴨監獄署長へと榮進します。巢鴨監獄は明治時代最大の模範監獄で、四郎助が34歳の若さで署長となったのは、高い評価を受けてのことでした。釧路集治監から行刑業務を始め、着実に実績を上げた四郎助は、当時の行刑界では第一線を走る代表者となっていたのです。洗礼を受け新たな出発をした四郎助。しかしこの後、教誨師の雇用問題から本願寺との間に大きな問題が起こります。（つづく）